南区薬師通所在

第Ⅱ次呼続遺跡発掘調査
概要報告書

1985

名古屋市教育委員会

Ⅰ はじめに

呼続遺跡は、標高10m～15m程の笠寺台地のほぼ中央部の西端で、「曽池」と呼ばれる浅谷地形の東側に位置する。名古屋市教育委員会が、1980年に市立呼続小学校地内で発掘調査を実施し（第1図1－D地点）、古墳時代後期前半の竪穴住居跡8軒と同時代の遺物や、鎌倉時代から室町時代の遺構と遺物を発見している。一方、市立新効中学校地内での遺物散布状況は、1978年の校舎改築工事で若干の土師器や須恵器が（第1図1－E地点）、1967年のプール建設工事で多数の弥生土器が（第1図1－F地点）出土したという情報があり、校地の東側に集中しているようである。

今回の調査は、新効中学校の校舎改築工事に伴うもので、教育委員会文化課と建設課とが事前協議をし、約180㎡が調査対象面積となり、見晴台考古資料館が実施した。

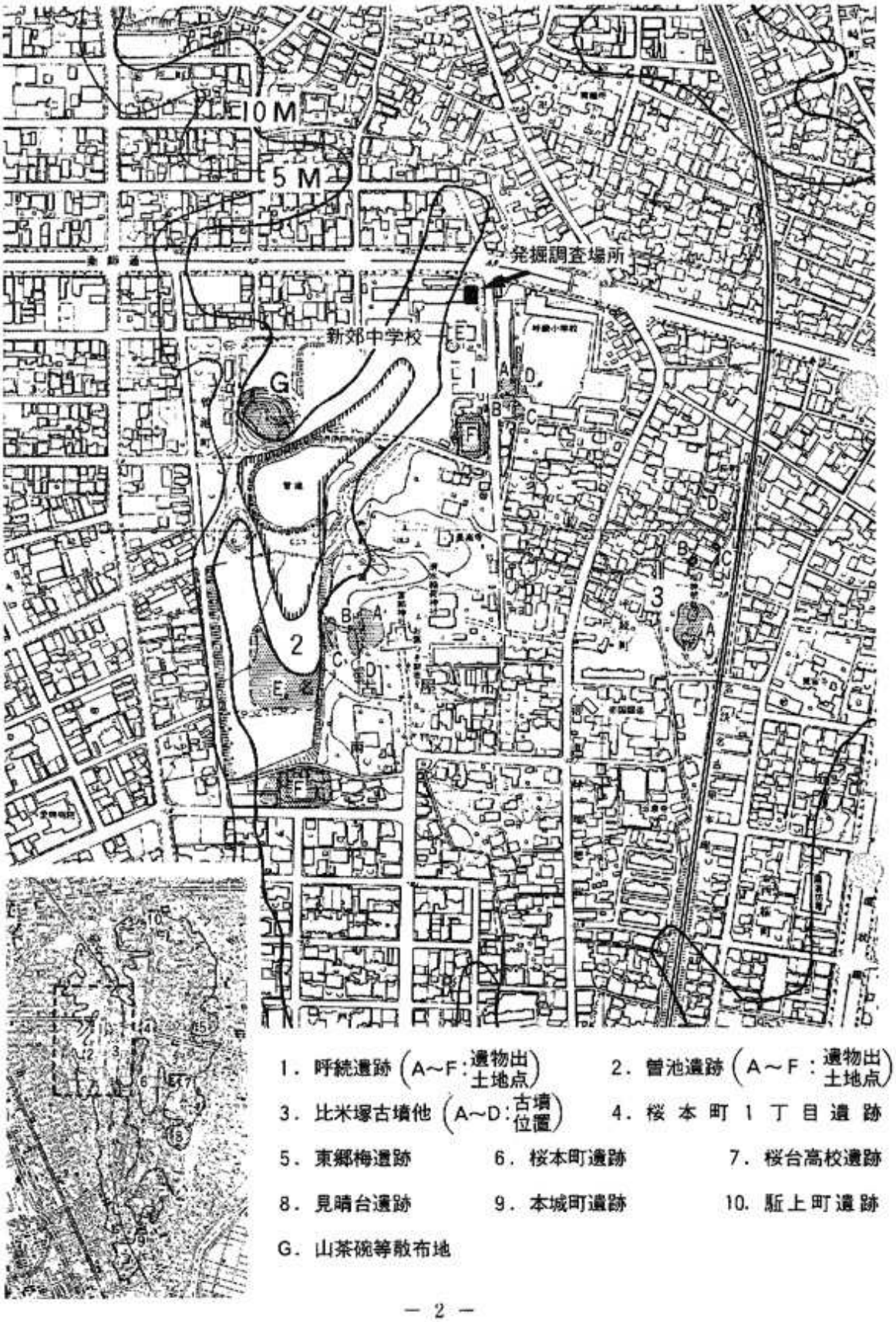
調査期間は、1984年10月8日から10月24日までの実働12日間であった。校舎改築工事の工期の制約から調査日数を短縮する必要があり、遺構実測図作成を空中写真撮影による方法で行った。調査区は、旧地形が標高9mから7m程の斜面部分となる位置にあたり、湧水が著しい状況であった。そのため、検出した遺構が数日後に崩壊してしまうほどであった。調査中に遺構と思われたものの形状を簡単な記録にした後、空中写真撮影の方法で作成した実測図上で、その位置を復元することで崩壊部分を補った（第2図）。地山層は、南東隅で淡黄褐色砂シルト層、北西隅で青灰色砂層となり、湧水するため、いっそう遺構の形状維持が難しい条件が重なった。地山層の確認のため、試掘（T. 1～T. 3）を実施したが、その結果さらに湧水を誘発させた。

遺物は、斜面地形に流入した状態で、コンテナに5個分検出さした。

遺構は、溝状遺構（D. 1・D. 2）や土壙状遺構（K. 1・K. 2）があるが、後者は自然地形とも考えられる。

▲ 発掘調査風景

第１図　周辺の遺跡分布図



1．呼続遺跡（A～F：遺物出土地点）　2．曽池遺跡（A～F：遺物出土地点）

3．比米塚古墳他（A～D：古墳位置）　4．桜本町１丁目遺跡

5．東郷梅遺跡　6．桜本町遺跡　7．桜台高校遺跡

8．見晴台遺跡　9．本城町遺跡　10．駈上町遺跡

G．山茶碗等散布地

Ⅱ　遺構と遺物

1．遺構（第２図参照）

溝状遺構（D．1・D．2）は、発掘区の南東部において、淡黄褐色砂シルト層面で検出された。D．1とD．2は、並行する状態にあり、発掘区の南中央付近で途える。検出時において、D．1の形状は最大幅約２ｍ、最大深約0.6ｍで、D．2の形状は最大幅約１ｍ、最大深0.4ｍである。埋土は、各々とも暗黒褐色砂シルト層であった。遺物は、各々とも少量の須恵器と土師器の破片が出土したが、時期は明らかでない。

土拡状遺構（K．1・K．2）は、青灰色砂層面で検出された。検出時において、K．1の形状は最大長約1.5ｍの楕円形で、最大深約0.3ｍである。埋土中より須恵器片が出土した。K．2の形状は、最大短辺約1.5ｍの方形状で、最大深約0.5ｍである。遺物は出土していない。K．1・K．2ともに、斜面地形での落ち込みとも考えられる。

その他に、発掘区中央部に直径約0.5ｍの柱穴が３ケ所ある。これは、現代遺構で、直径約0.3ｍ・残高約２ｍの木柱の痕である。

2．遺　　物

自然地形の傾斜面に堆積する遺物包含層は、発掘区最深部となる北側の土層断面で、約40cmの厚みを測る暗黒褐色砂シルト層であり、上層と下層とに区別された。下層には、腐敗植物が多量に含まれ、検出時に一面に小葉や小枝が散乱する状態であった。遺物の大多数は上層より出土し、若干の遺物が下層の上部より出土した。上層からは、近世陶器・山茶碗・灰釉陶器・須恵器・土師器が、下層からは、須恵器・土師器が発見されている。

近世陶器には、16世紀代前半の灰釉小皿（No．18・19）などがある。山茶碗は、鎌倉時代前半のもの（No．16・17）がある。灰釉陶器（No．14・15）は、８世紀中頃のものと思われる。須恵器は、奈良～平安時代のもの（No．8・10・11・12・13）が大多数を占め、７世紀代のもの（No．7・9）も若干ある。土師器は、７～８世紀代と思われるもの（No．2～6）と、６世紀代と思われるもの（No．1）がある。小型壺（No．1）は、外面が刷毛目調整後にヘラみがき、内面がヘラけずり、口縁部が横なでされるもので、おそらく丸底となるものであろう。

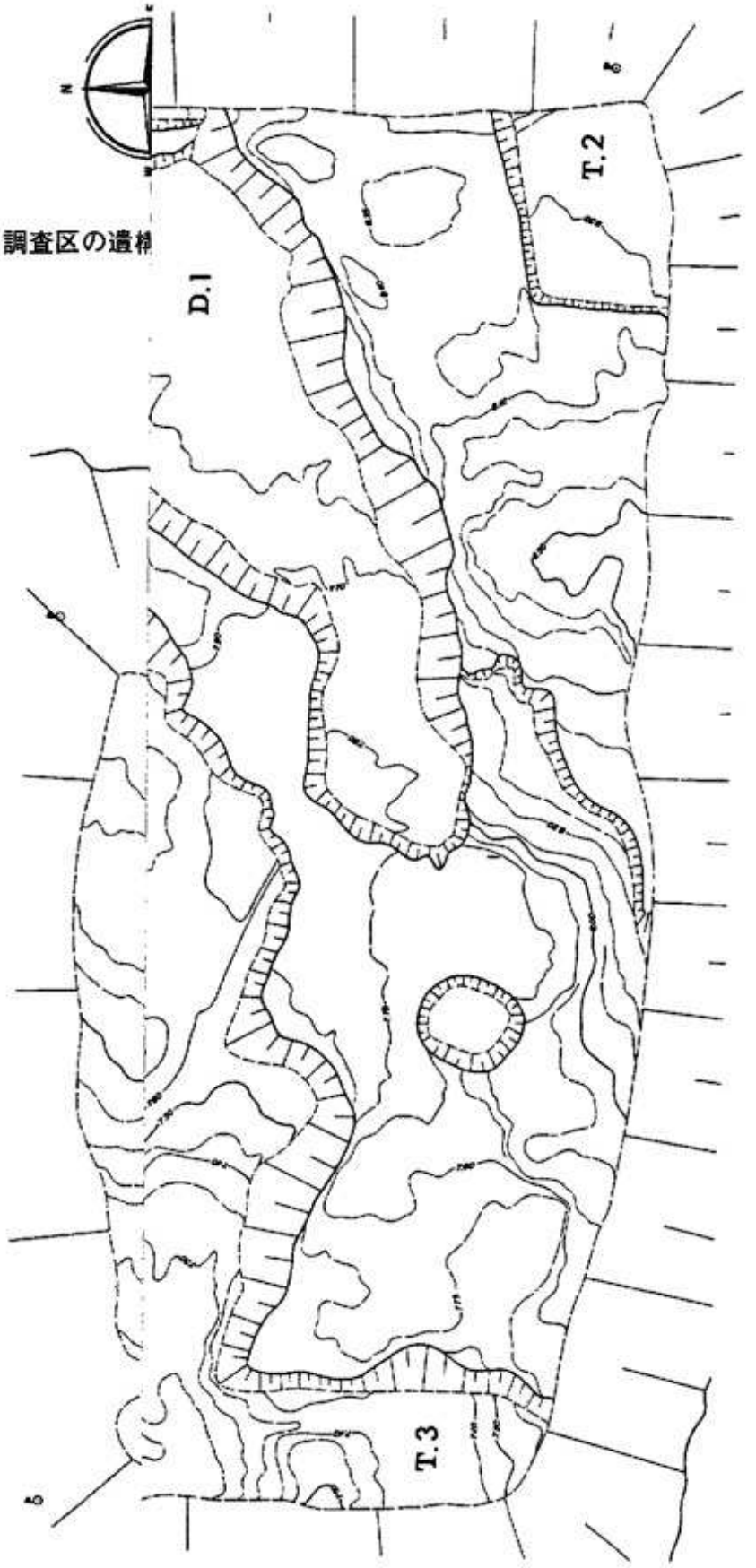
Ⅲ おわりに

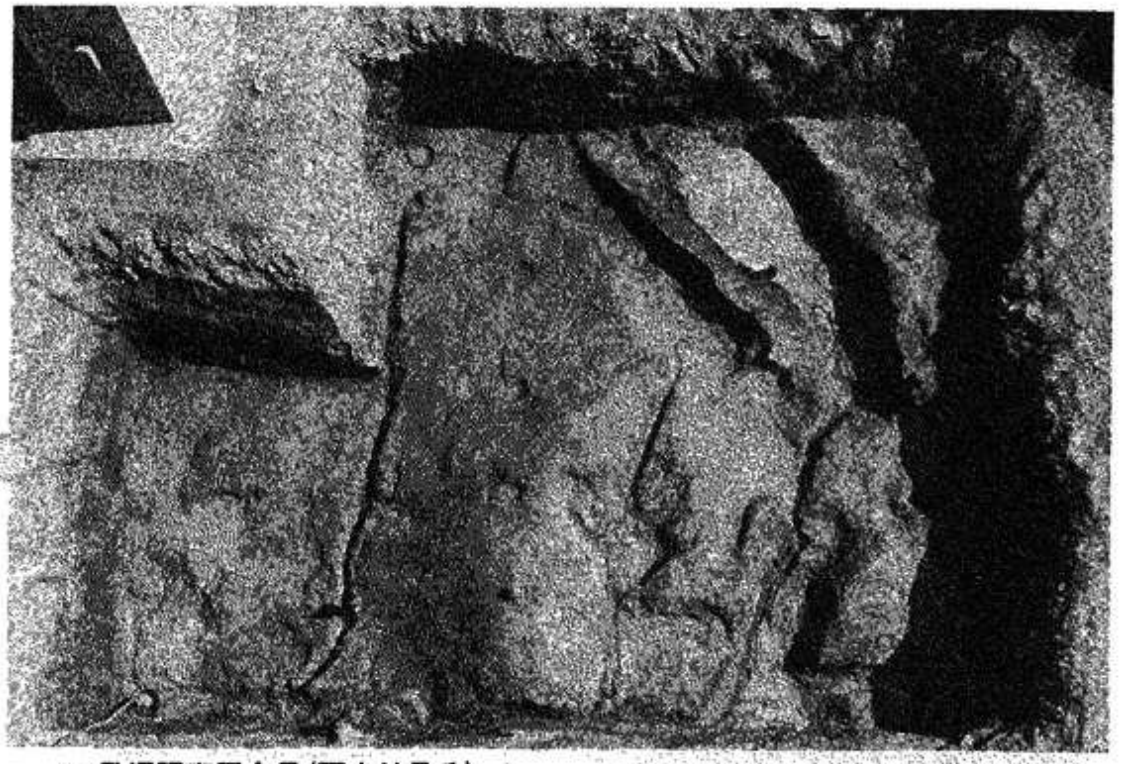
今回の調査区は、明治24年の地図より復元した等高線（第１図）より判断すると、浅谷地形の東側傾斜面に位置するため、当初、木製品の発見や水田跡の検出が期待された。しかし、その結果は、呼続小学校地内での調査出土の遺物とほぼ同時代の遺物が出土したにとどまり、遺構もあまりない状態であった。

呼続遺跡では、弥生時代後期以降に人々の生活が始まると考えられているが、２回の調査結果からすれば、弥生土器の出土がなかった。調査地近辺は、古墳時代後期以降の集落跡であったとも考えられる。本遺跡の内容は、資料が少なく、明らかでないのが現状である。

歴史的環境からすれば、比米塚古墳などを築造した集団が、呼続遺跡や曽池遺跡などを形成したと考えられる。一方、六本松南遺跡の古墳時代方形周溝を築造した集団が、桜本町遺跡や桜台高校遺跡などを形成したと考えられる。現在の桜本町通の通る浅谷をへだてて、ほぼ同時期に二様の墓制が東西に見られ、前者の西側集団と後者の東側集団とに権力構造の差があったと推定できる。この推定上で、今回の調査地で、墓制の差にみられる西側集団の優位性を傍証するような、生活基盤となった水田跡が発見できるのではないかと期待したわけである。

第２図　調査区の遺構

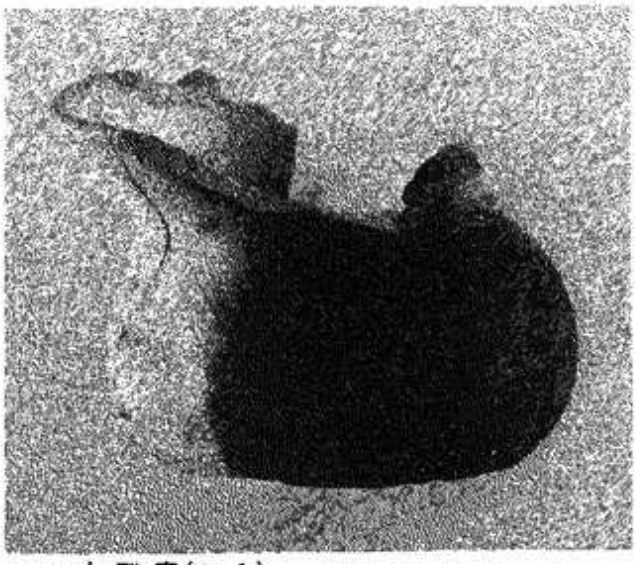




▲ 発掘調査区全景(西より見る)

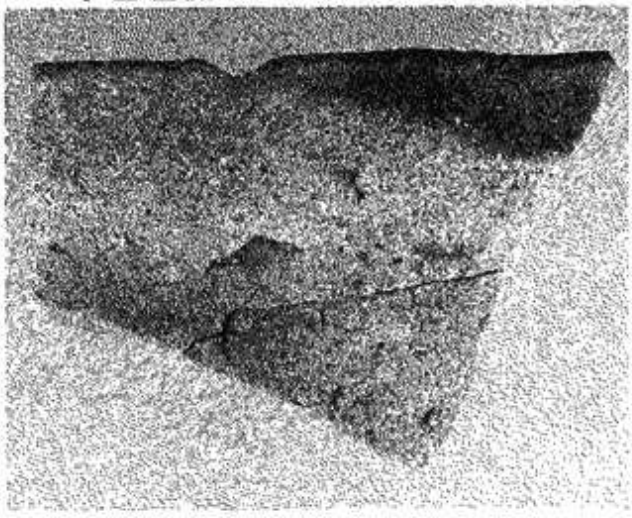
▼ 溝1と溝2(北西より見る)

土師器



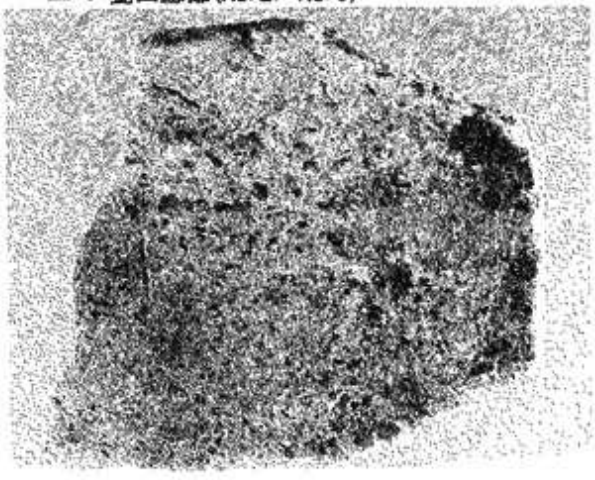
▲小型壺(No. 1)

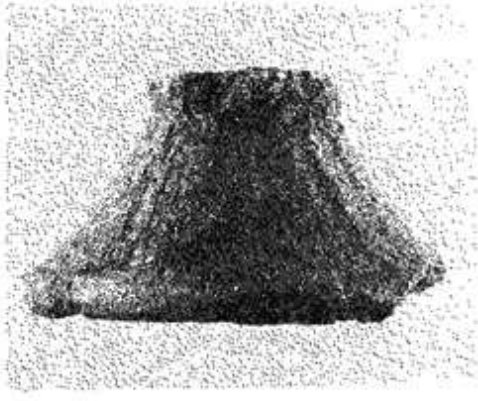
▲高杯脚部(No. 4)



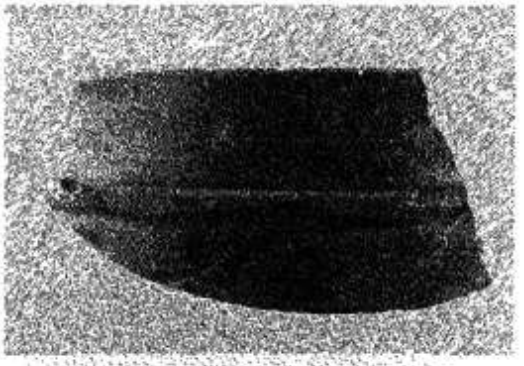
▲▼甕口縁部(No. 2. No. 3)

▲▼甕台部(No. 5. No. 6)

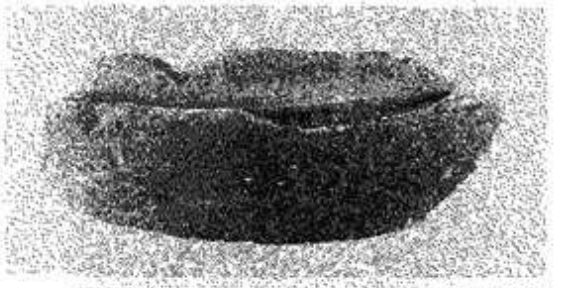




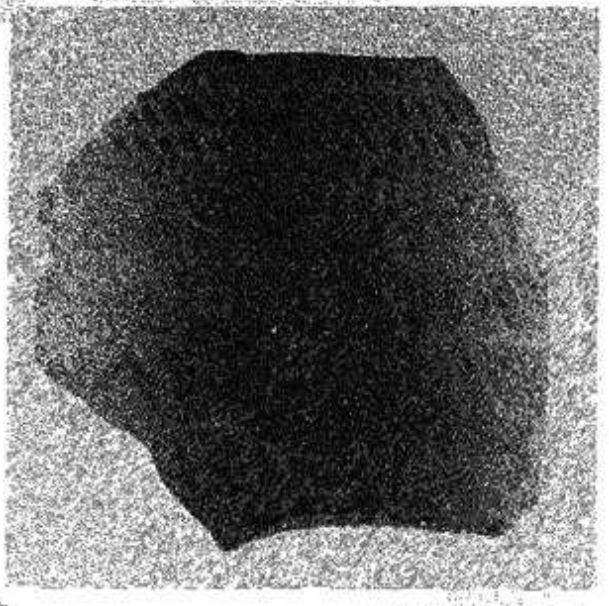
須恵器



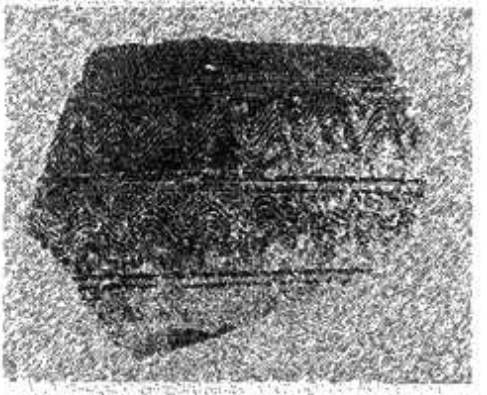
◀▼坏　身(No. 7. No. 8)



▼有段高坏脚部(No. 9)

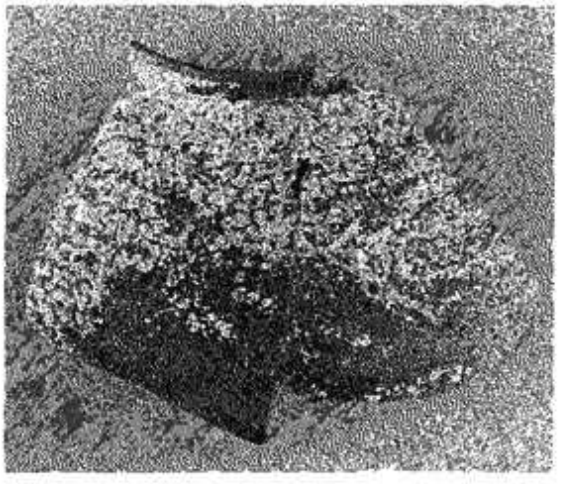


(No. 10) ▶

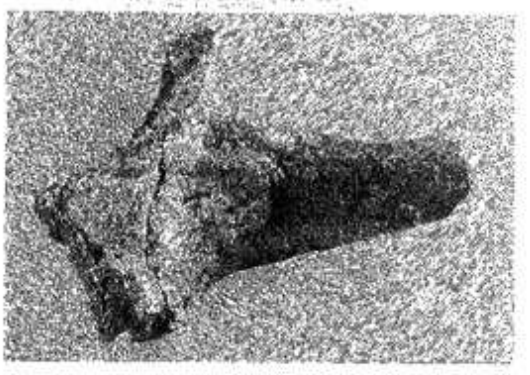


高坏脚部(No. 11) ▶

▼短 頸 壺(No. 12)

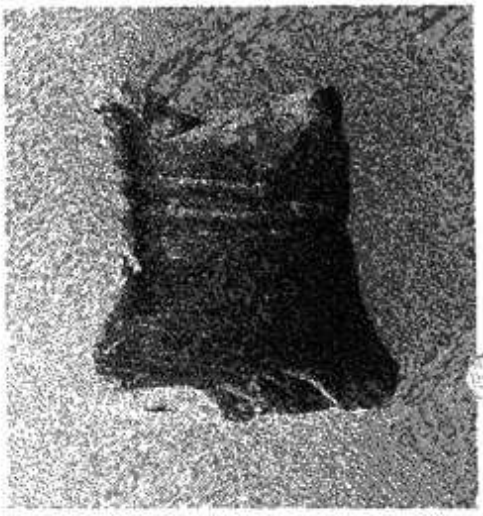


▼こしき把手(No. 13)



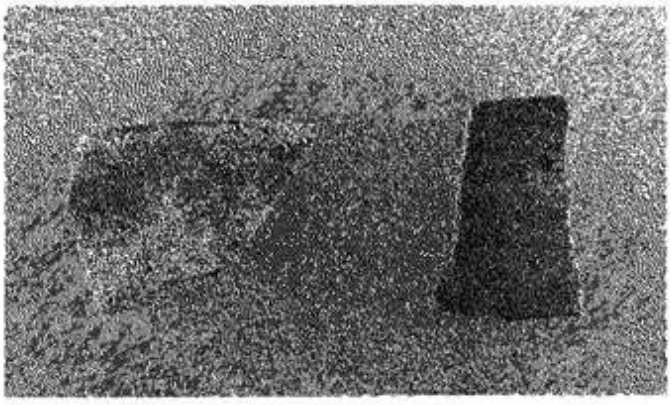
灰釉陶器

▲長 頸 瓶(No. 14)



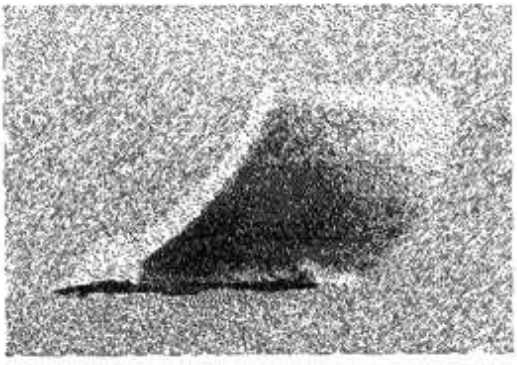
▲長 頸 瓶(No. 15)

中世陶器

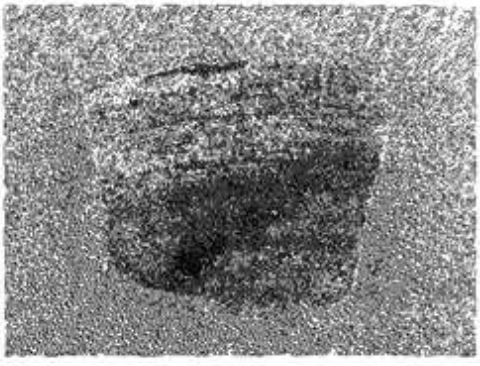


◀山 茶 碗(No. 16. No. 17)

近世陶器



▲古瀬戸小皿(No. 18)



▲古瀬戸小皿(No. 19)

南区薬師通所在
第Ⅱ次呼続遺跡発掘調査概要報告書

1985年3月31日 印刷・発行

編　集　名古屋市見晴台考古資料館
発　行　名古屋市教育委員会
印　刷　株式会社刈谷高速印刷